

特集

はじめての箱庭

「箱に砂を敷いて、その上にミニチュアを自由に置き、情景を作る」

箱庭について一言で説明するならば、それで事足りてしましますが、日本での箱庭の歴史は古く、鎌倉時代、金閣寺・銀閣寺の庭園設計の際に、浅い木箱にその原型を作ったのが始まりと言われています。

その後、芸術としての《盆景（盆の上に情景を作る）》などが発展し、江戸時代後期から明治時代にかけては、小さな箱の中に景観を作っ

て楽しむ《箱庭》が流行するなど、ミニチュアの景色を作る文化は脈々と続いてきました。

戦後再び箱庭が注目されるようになったのは、心理学者の河合隼雄氏によって《箱庭療法》が日本に導入されてからです。

スイスのユング研究所に留学中の河合氏が、現地ですべてこの技法に触れたとき、「子ども頃に見た日本の箱庭に似ている」と思ったと言われています。

箱庭療法は、海外では「Sandplay Therapy」

砂遊び療法・と呼ばれていますが、河合氏が日本に導入する際に「箱庭療法」と意識したのは、その時の印象が大きく影響したのだろうと思われまます。

制作が難しくなく、言葉を使わずに表現できる箱庭は、言語表現が苦手な日本人にとって楽しめる遊びであるとともに、自己表現の手段として新たに受け止められ、現在、セラピーの場で大いに活用されています。

このように、表現手段として大きく花開いた

箱庭に、また新たな歴史のページが加えられるようとしています。

平成二十三年度に改定された小学校・中学校『教材整備指針』に特別支援教育枠が設けられ、その例示品名に《箱庭》が加えられました。今後、特に学校現場では、子どもたちが箱庭に触れる機会も増えることでしょう。日本人が古くから親しんできた《箱庭》という遊びを通して、子どもたちが自分を自由に表現し、豊かな心が育まれることを願ってやみません。